

つたのみ日記 (その二)

坂元彦太郎



某月某日

かねてから、つくってもらって
たコンクリート製のすべり台が、や
つと出来上がったので、こどもたちが
大喜びで、すべりまくっている。

お茶の水の幼稚園の前庭の正面にあるど
てに、上り段とトンネルをコンクリートで
つくり、それをくぐって上の段に上がり、
それが、曲りくねって(？)下の段まです
べるようにしてある。長さは、普通のすべ
り台の三倍ぐらいもあるうか、コンクリー
トのところは、クリーム色に染めてあるの
で、上段の銀色に塗った鉄のさくともにも、
あたりの緑の木々とうつり合って、とても
印象的である。

長い間、工事中には近寄れなかったせい
もあろうが、今日できあがったばかりのす
べり台には、年長の男も女も、年少の幼児
たちもまじえて、上り降りに大にぎわいな

のである。

見ていると、すべる姿勢なり、態度なり
というものは、こどもによって大ちがいで
ある。中には、腹ばいながらすべるのやら、
バドミントンをおしりに敷いてすべるのや
ら、いろいろある。さらに、頭を上腹ば
ったり、からだを横にしてすべったりして、
意地わるそうに見えるこどもたちもいる。

こどもたちが、おひるのべんどうのため
に、室に引き上げはじめて、幼児の影が少
なくなりかけたとき、ふと、私もすべって
やろうと思いついたのだ。すばやく、
あたりを見まわして、先生方の姿のないの
を見きだめると、つかつかと石段をあがり、
首をすくめてトンネルをくぐり、そして、
すべり台の入り口に、立っている自分を見
出したのであった。

「あら、先生もすべるの」
と、残っていたこどもの声を耳にしなが

ら、私は、からだがちゆうに浮いたような
軽さを感じた。からだは、すべり出して
たのである。コースの曲り角のところ
は、のぼしていた私の長い脚がつかえて
しまったので、いそいで、脚をちぢめ、両腕
で両脚を抱きかかえるようにしたら、また、
ふわりとすべり出して、頬を通りすぎる風
をたのしみながら、いちばん下まで、安着
したのである。

ほんとに、久しぶりにすべったものだな
と、すんでもなお、からだに残っている身
軽な快さを味わっていたが、いちばん最後
にすべったのは、いつだったか知ら、と考
えはじめた。

とたんに、私はわからなくなった。私ど
もの小さいときには、すべり台なぞはな
かったし、そののちいつすべったことがある
か、またはないのか、全く、ぼんやりして
るのである。幼児の時のことなど、わかっ
てるように思っても、ほんとは、こんな
ことがあるのではないかな、と商売意識が
出てきた。

× × × × ×